信心獲得

――証大涅槃の真因――

小野蓮明

一

親鸞の九十年の仏道の歩みのなかで、もっとも決定的な意味をもつ出来事は、「よき人」法然の「仰せ」との出遇いであり、その仰せに導かれて「雑行を棄てて本願に帰」したことである。『歎異抄』によれば、親鸞は、法然の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」（「聖典」六二七頁）の一言に出遇い、その教言に育まれて、「ただ念仏のみぞまことにておわします」（「聖典」六四一頁）と断言する念仏者となったのである。のみならず、本願念仏の一道こそが、われら一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であり、証大涅槃の道であることを、「浄土真宗」として開顕されたのである。

法然の本願念仏の教えが無上仏道であるということが、親鸞においてどのように開顕されたのであろうか。親鸞は、法然の念仏往生の教えに出遇って獲得された信仰的自覚を、選択本願の行信と捉え、本願の念仏をより根源的に本願の名号と了解し、その本願の名号を行信する道をもって、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道である、と顕らかにされたのである。本願の名号を行信する一道こそ、群萌に開かれた無上仏道であるという、親鸞の言葉は多い。

しかるに煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、すなわちこれ常楽なり。常楽はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。無為法身はすなわちこれ実相なり。実相はすなわちこれ法性なり。法性はすなわちこれ真如なり。真如はすなわちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまうなり。（「証巻」「聖典」二八〇頁）

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩悩を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。（『唯信鈔文意』「聖典」五五二頁・傍点筆者）

ここに「煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌」といい、「具縛の凡愚、屠沽の下類」といわれているものは、真実教である『大無量寿経』において、

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまう。世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。（「聖典」八頁・傍点筆者）

と、如来の本願の機を現わすものとして語った、「群萌」の現実相である。いまその「煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌」が、「往相回向の心行を獲」ることによって「大乗正定聚の数に入る」といわれ、また「無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号の信楽」において、「具縛の凡愚、屠沽の下類」なるものが「煩悩を具足しながら無上大涅槃にいたる」といわれるのである。この場合、「往相回向の心行」といい、「本願名号の信楽」といっても、それは要するに如来の大悲回向に帰し、如来の本願招喚の勅命に喚び覚まされた根源的な覚醒であって、一心帰命の信である。本願の名号に帰し、本願の名号に覚醒された一心帰命の信において、われらは「大乗正定聚の数に入」り、「煩悩を具足しながら無上大涅槃にいたる」のである。煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌を、煩悩具足のままに無上大涅槃にいたらしめ、大乗正定聚の数に入らしめる、本願の名号こそ、浄土真実なる仏道の法であり、この本願の名号に帰す

る一道こそ、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道なのである。われら群萌の拠るべき道、立つべき道は、これ以外にあり得ないことを、親鸞は深い確信をもって、「ただこれ、誓願一仏乗なり」（「行巻」「聖典」一九七頁）と喝破されたのである。

法然が『選択集』において、念仏が往生浄土の正業であることを顕揚されたとき、

それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雑二行の中に、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。（「聖典」一八九頁）

といって、いわゆる三選、すなわち聖浄二門、正雑二行、正助二業という行々相対において、決判されるのである。それに対して親鸞は、

「一乗海」と言うは、「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなわちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなわちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るは、すなわち一乗を究竟するなり。（中略）一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり。（「行巻」「聖典」一九六頁）

といって、真に一乗、大乗の名に価する仏道は、「ただこれ、誓願一仏乗なり」と言い切られたのである。そして、その誓願について、

おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信楽の願なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。往生は、すなわち難思議往生なり。仏土は、すなわち報仏報土なり。これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。（「行巻」「聖典」二〇三頁）

といって、誓願の仏道の内実を「選択本願の行信」と捉え、その行信に自証される自覚内容を「誓願不可思議、一実真如海」であると了解されたのである。

「誓願不可思議、一実真如海」といわれるときの一実真如海とは、如来自証の無上涅槃の世界を意味するものであろう。いま、その如来自証の世界である無上涅槃の功徳が、如来の本願を信ずる信の一念に、信ずる人の身の上に生き生きと現前し、現成する事実を、親鸞は、大きく深い感動を込めて「誓願不可思議」と語ったのである。一般に不思議とか不可思議ということは、人間的な思慮分別心をもっては思いはかることのできないこと、或は人間的立場で起こり得ないことが起こり得た事実をいうのであるが、しかしそれは、ただ凡夫の心が及ばないということだけではない。

不可思議とまふすは、仏の御ちかひ、大慈大悲のふかきことを、こころのおよばずとまふすことばなり。こころおよばずといふことは、凡夫のこころおよばずとまふすことにはあらず、弥勒菩薩のおむこころおよばずとなり。仏、仏とのみぞしろしめすべきなり、それをふかしぎとはまふすなり。(「善導和尚言」「定親全」三・二三八頁)

「不可思議」ということは、「仏の御ちかひ、大慈大悲のふかきことを、こころおよばずとまふすことば」であって、それは「仏、仏とのみぞしろしめすべき」ことである。すなわち如来の本願を信ずるその身の上に、如来と如来自証の無上涅槃の世界が、生き生きと開き示される、その不可思議なる事実をいうのである。

では、選択本願の行信に、如来と如来自証の無上涅槃界が生き生きと現前し現成するという、この不可思議なる事実は、一体何によって起こるのであろうか。

弥陀の誓のゆへなれば
不可称不可説不可思議の
功徳はわきてしらねども

信ずるわがみにみちみてり（前同・二三七頁）

この不可称不可説不可思議の功徳の現前は、偏えに「弥陀の誓のゆえ」である、と親鸞はいう。弥陀の誓いとは、無論阿弥陀の誓願である。

ちかいのようは、無上仏にならしめんとちかいたまえるなり。（「正像末和讃」「聖典」五一一頁）

十方衆生を我が国に生らしめなければ、仏自ら仏としての正覚を取らない、と誓った、仏の根本本願である。仏の全存在をかけた本願の声に喚び覚まされ、本願招喚に帰した一心帰命の信に、如来と如来正覚の無上涅槃の徳が、「信ずるわがみにみちみ」つるのである。

如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功徳をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。（『一念多念文意』「聖典」五三九頁）

安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信ずる人にえしむとしるべしとなり。（前同・「聖典」五三七頁）

如来の誓願に帰し、招喚の声に覚醒した帰命の信に、真如一実なる無上涅槃の徳が、信ずるわが身の上に生き生きと現前し現成する事実を、親鸞は深い感動を込めて語っている。

二

選択本願の行信、すなわち本願の名号に覚醒された一心帰命の信に開かれる自覚内容を、親鸞は端的に「誓願不可思議、一実真如海」と捉えたのであるが、では、そのような信心とはいかなるものであり、また、いかにして獲得されるのであろうか。

親鸞は、選択本願の行信、とりわけ証大涅槃の真因としての信について、

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。（「信巻」「聖典」二二三頁）

といって、信心とは「如来の清浄願心の回向成就」であるといい、また、その信心の獲得について、

それ以みれば、信楽を獲得することは、如来選択の願心りよ発起す、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。（「信巻」「聖典」二一〇頁・傍点筆者）

と述べている。それは、信心とは、いかなる意味においてもわれら衆生の有漏心より起こす心ではなく、如来の選択本願の願心より発起せるものであり、真心の開闡は、偏えに大聖世尊の教言に教養され顕彰されるものである、というのである。

『歎異抄』の後序（跋文）に「信心一異の諍論」といわれる問答が伝えられている。吉水時代の親鸞が念仏の同朋達と相論をしたとき、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」といって、信心はいかなる人においても同一であり、しかもその信心は、「往生の信心」といって、選択本願の念仏に帰した信心であるからこそ、往生の一道に立たしめるものに外ならない、と主張されたのであった。しかし勢観房、念仏房などの同朋達は、「いかでかその義あらん」と疑問を投げかけられたので、師である法然上人に事の子細を申しあげて、自他の是非を定めていただいたというのである。そのとき法然は、

「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとりなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」と、おおせそうらいし……。（「聖典」六三九頁）

といって、信心の特質を「如来よりたまわりたる信心」という、いかにも独創的な信仰理解を与えたのであった。信心とは「如来よりたまわりたる」ものとして、源空においても、善信においても「ただひとつなり」と断言された法

然の信仰理解の思想は、親鸞が吉水教団時代に、師法然から学び得た最も注意すべき教えであったと思われる。自己の内に起こった信心が、しかも「たまわりたる」ものであるという法然の信仰思想が、親鸞において、如来回向の信、如来の清浄願心の回向成就という、親鸞教学の最も重要な概念として、鋭く深く尋ね当てられることとなるのである。

信心は、自己の内に起こった心であっても、決して自己の内なる心ではなく、むしろ人間の自己心を根底より破って発起する如来の願心である、それ故に「たまわりたる」ものであるという信仰理解は、阿闍世の回心を語って、「無根の信」と教えたあの『涅槃経』の教言に、思想的源泉があるのではあるまいか。

世尊、我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より栴檀樹を生ずるをば見ず。我今始めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見る。「伊蘭子」は、我が身これなり。「栴檀樹」は、すなわちこれ我が心、無根の信なり。「無根」は、我初めて如来を恭敬せんことを知らず、法・僧を信ぜず、これを「無根」と名づく。世尊、我もし如来世尊に遇わずは、当に無量阿僧祇劫において、大地獄に在りて無量の苦を受くべし。我今仏を見たてまつる。これ仏を見るをもって得るところの功徳、衆生の煩悩悪心を破壊せしむ、と。(「信巻」「聖典」二六五頁・傍点筆者)

父を殺し、母をも殺さんとした阿闍世が、如来の教説に値遇し教養された、回心懺悔の表白において語られた「無根の信」こそ、信心の超越的生起性を見事に表現している。「我今始めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見る」、それは、仏の教言に値遇したその功徳をもって、自己の内なる煩悩悪心をつき破って、自己の内に根拠のありようのない清浄真実の心が、しかもいま事実として生起した、という表白である。阿闍世の身に回心として生起した信、それは無根の信なるがゆえに、「たまわりたるもの」としか言いようのない覚醒である。法然が「往生の信心」の特質を捉えて「如来よりたまわりたる信心」といわれた思想的表現は、このような阿闍世の獲信の体験を最も深くわが身に自証されたところから言われたものではあるまいか。

親鸞が「帰命」を釈して、

帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり。（『尊号真像銘文』「聖典」五二一頁）

といわれたように、帰命の信とは、釈迦・弥陀の二尊の発遣と招喚に開かれる根源的な覚醒である。教主世尊の発遣の教言に帰し、如来の本願招喚の勅命に喚び覚まされた根源的な目覚めが信心である。だから信心は、自己の内に起こった心であり、自己の内に開かれた目覚めであっても、自己の心とはいわれないのである。確かに信心は目覚めである限り、それは自己における自己の目覚めである。しかしその目覚めは、自己の内に起こる自己の目覚めでありながら、自己の内にその根はない。自己の存在を底から転じ成ずる信心の目覚めは、いわば超越的な生起である。

信心の発起について語った、親鸞の最も厳密な言葉は、前に掲げた「別序」の発端の言葉である。

それ以みれば、信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。

この言葉は、信心発起の因縁を最も端的に語っている。信心獲得の因は「如来選択の願心」であり、獲信を開く縁は「大聖矜哀の善巧」であるという。すなわち信心は、弥陀・釈迦二尊の招喚と発遣の声を因縁とする覚醒であるという。注意すべきことは、信心の「獲得」が「発起」であるといい、真心の「開闡」は「顕彰」であるといわれていることである。とくに信心の獲得が発起であるというのは、信心の超越的生起性を語っている。

親鸞は、「善導和讃」に

釈迦弥陀は慈悲の父母
種種に善巧方便し
われらが無上の信心を
発起せしめたまいけり（「定親全」二・一一四頁）

と詠っているが、その「発起」の言に左訓して、

ひらきおこしたまふなり

といい、また草稿本の左訓には、

ひらきおこす　たておこす　むかしよりありしことをおこすをほちといふ　いまはしめておこすをきといふ

と述べている。この左訓から窺っても、信心とは、自己に起こるものでありながら、しかし自己の存在をその根底より転換し転成する超越的生起であることが知られる。自己の存在を根底より転換し転成するはたらきは、如来の選択本願の外にはない。如来の摂取不捨の大悲願心が、衆生の自己心を打ち破って、衆生を真に成就せんとはたらく。如来の願心の回向成就、それが信心である。願成就の信といわれるように、如来の本願はわれらの信として成就し、信心は願心の回向成就の外ではない。信心の獲得が即発起であるということは、信心の獲得は如来の願心の回向成就である、ということを意味する。「我れは如来を信ず」という信心は、如来回向であり、如来の願心の回向成就なのである。

しかしまた、信心は、最も深い意味において、自己主体の内面に属する根源的自覚であるから、私の内面における出来事であり、私の内に発るものであることも否定できない。親鸞が信心について、一方では「発起」といいつつ、一方では、

能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃（「正信偈」「聖典」二〇四頁・傍点筆者）

信心開発即獲忍　証知生死即涅槃（「文類偈」「聖典」四一二頁・傍点筆者）

といい、また

一念は、これ信楽開発の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり。（「信巻」「聖典」二三九頁・傍点筆者）

といっているのは、その故であろう。「能発」も「開発」も、文字通り「開き発す」ということ、内より開き発すという意味であろう。「発起」は「超えて発る」ということ、信心の超越的生起を意味し、「能発」「開発」は「内から

開き発す」という意味であるとすれば、信心について、一方では発起といい、一方では能発・開発といわれた意味は何であろうか。それは、信心は、如来よりたまわりたるものであると同時に、信心は最も厳密な意味における根源的な覚醒であるからである。能発・開発ということは、畢竟「聞き開く」ということ、すなわち如来の願心を聞き尋ね、聞き開く、という意味であろう。親鸞が「聞」を釈して、

しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。（「信巻」「聖典」二四〇頁）

といわれたように、「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」きことであり、如来の大悲願心を尋ね聞き開くことであって、要するに広大の仏智を獲得することであろう。

智慧の念仏うることは
法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば
いかでか涅槃をさとらまし（「正像末和讃」「聖典」五〇三頁）

この和讃が語っているように、法蔵願力の徹底が信心の智慧なのである。法蔵の願心を聞き開くという願心の徹底のほかに信心の成就はない。一念の信の内容が、つねに「喜愛心」といわれ、「広大難思の慶心」と現わされるのは、この故である。したがって信について、発起といわれ、また能発・開発といわれたことは、相矛盾することではなく、回向の信の内実を内からと外からと言い現わされたものといえる。

三

「信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す」といって、信心獲得は、すなわち発起である、と親鸞はい

う。それは、「我れは如来を信ず」という帰命の信は、如来からいえば、如来が我れに名告り現われて、我れにおいて如来が如来たるを成就することである。信心は、私の上に成就するから獲得であり、開発であるが、しかし私に獲得された信心は、私を超えている。私を超えた如来が、しかも私に成就する、否、私として成就する。私を超えた如来が私に名告り現われて、「我」として成就すること、それが「獲得」即「発起」である。

そのことを最も具体的によく現わしているのが、

夫以獲二得信楽一発三起自二如来選択願心一

といわれるときの「自」の一言である。「みずから」「おのずから」と読まれる「自」を「より」と読ませて、次の句の

開二闡真心一顕三彰従二大聖矜哀善巧一

というときの「従」と意識的に区別されていることに注意すべきである。「自」とは自性のことで、ものがもの自身から性起するという意味であろう。つまり信心獲得は、「如来選択の願心より（自）発起す」というのであるから、信心とは、如来が如来の自性を失わずに衆生に発起すること、如来の願心が衆生の信心として成就することである。如来が如来性を失って衆生となるのではなくて、如来が如来のままで衆生となり、衆生に成就する、否、衆生として成就する、それが信心である。したがってわれわれからいえば、信心を獲るというが、その内実は、如来が如来のままに自らを衆生に現前し成就することである。「自」はそのような如来性起を示している。願と信、願心と信心は、その体は決して別ではない。如来選択の願心、その願心の回向成就が、衆生の信心なのである。願としての如来が、信として成就するのである。その限り信は、本願成就の信といわれるように、如来の成就を意味する。と同時に、何よりも本来的自己の成就、すなわち「親鸞一人」といわれた「一人」という根源的主体の成就を意味するものといえる。

ところで、このような獲信、衆生における本願の信の発起は、具体的には必ず大聖世尊の教言との値遇を決定的な

縁とするものである。だから親鸞は、次に

開二闡真心一顕三彰従二大聖矜哀善巧一

といって、獲信の縁起性を示されたのである。「真心の開闡」は「大聖矜哀の善巧より（従）顕彰せり」といって、「従」は獲得信心の縁起を現わしている。「自」は一つのものの因果、言い換えれば、真の因は果になる因であり、果はすでに因のうちに内存するものとして一であるという因果を現わし、「従」は二つのものの関係、すなわち大聖世尊とわれら衆生との関係を示す言葉である。無論、大聖世尊とわれら衆生との関係というとき、それは教法における関係であって、教えるものと教えられるものとの関係である。真心の開闡は、大聖釈迦如来の教説との値遇が決定的な縁であるということは、いかなる求道の行人も教えに出遇い、教えに帰し、教えに育まれて、本願招喚の勅命に喚び覚まされていくのであって、まず諸仏如来の教説との値遇が、信心獲得の決定的な縁である、ということである。

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。

（「総序」「聖典」一五〇頁）

親鸞における如来の教説との値遇の感動の叫びが、われらの心底に深く響き来る。すでに『大無量寿経』は、値遇の難を説いて、

如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これまた難しとす。もしこの経を聞きて信楽受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。（「聖典」八七頁）

と教えている。

真の知識にあうことは

かたきがなかになおかたし
流転輪回のきわなきは
疑情のさわりにしくぞなき（「高僧和讃」「聖典」四九九頁）

「よき人」法然の「仰せ」に導かれて、如来の教説に帰し、本願招喚の勅命に覚醒し得た深い感動を通して、親鸞は値遇の難を詠っている。値遇の難は、したがってそのまま獲信の難なのである。親鸞は「信巻」に、

しかるに常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信楽実に獲ること難し。何をもってのゆえに。いまし如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり。（「聖典」二一一頁）

と述べているように、獲信の難は、実は真実の教えとの値遇の難である。そうであるとすれば、「有縁の知識」に出遇い、師の教言に導かれて真実教との決定的な値遇があるならば、わが身における信心の発起は、むしろ自然であるというべきである。

そのような獲信という回心の根源体験を、きわめて現実的に具体的に語り伝えてるのが、善導の「二河白道の譬喩」である。その譬喩の要をいえば、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん」という、いわゆる三定死という存在の限界状況に立ったとき、行人の求道心は、「一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道あり、必ず度すべし」と「自ら思念」したとき、魂の底に響き来る決定的な二つの声を聞き当てたという信仰体験である。すなわち、その一つの声は、

東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く。「仁者ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。もし住まらばすなわち死せん」と。（「聖典」二二〇頁）

さらにもう一つの決定的な声とは、

また西の岸の上に人ありて喚うて言わく、「汝一心に正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん。すべて水火の

難に堕せんことを畏れざれ」と。

と響き来る声である。善導は、この二つの声について「合喩段」で、

「東の岸に人の声勧め遣わすを聞きて、道を尋ねて直ちに西に進む」というは、すなわち釈迦すでに滅したまいて後の人、見たてまつらず、なお教法ありて尋ぬべきに喩う、すなわちこれを声のごとしと喩うるなり。（中略）

「西の岸の上に人ありて喚う」というは、すなわち弥陀の願意に喩うるなり。（「聖典」二二一頁）

と釈している。

善導は、ここで教えのもつ独自の意味を「声のごとし」といって、教えとは、単なる教義や教理ではなく、真実にわれらを呼び覚まし、呼び帰してくれるいのちある言葉であって、発遣の声であるという。「仁者ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん」という声は、釈迦の発遣であって、如来の教説のもつ最も主体的な了解である。そして、この発遣の勧声を聞いたとき、魂の底に響き来るいま一つの決定的な声、それは「汝一心に正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん」という、西岸上の招喚の声である。この声こそ、外ではない、久遠の弥陀の本願招喚の声である。

設我得二仏一、十方衆生、至二心一信楽、欲二生二我国一、乃至十念。若不二生一者、不二取二正覚一。唯除二五逆誹謗正法一。

（「聖典」一八頁）

これは、十方衆生、一切苦悩の群生海の地底にまで自らを没して、もれなく我が国に生らしめなければ、仏自ら仏としての正覚を取るまい、と誓って、すべての衆生の目覚め帰るのを待ちつづける大悲招喚の声である。世尊の教言に発遣され、弥陀招喚の大悲の声に喚び覚まされた、大いなる目覚めが信心である。したがって信心とは、「汝」と喚びかけられる人間の誕生を、その内実とする自覚であるといえよう。

四

如来は、本願招喚において「我よく汝を護らん」と誓うて、行人を「汝」と喚びかけて、自らを「我」と名のるのである。「仁者」も「汝」もともに「きみ」「なんじ」「あなた」という称呼であるが、「仁者」は人格的な人間関係における呼びかけである。それに対して「汝」は、我と汝という自覚的関係をあらわす。本願における如来と行人とは、独立者と独立者の関係ではなく、自覚的内面の関係である。如来は、自らのうちに見いだされた我を汝と見、「汝一心に正念にして直ちに来れ」と喚びかけて、「我よく汝を護らん」と誓うのである。如来と衆生は、世尊と行人の関係のように独立した人格関係ではなく、本願における自覚的内面の関係である。衆生がまさしく苦悩の衆生として見いだされる場は、如来の外ではなく、如来の内に、如来の本願においてである。本願する如来と本願されてある衆生の相対は、本願において成り立つのである。衆生はすでにして「本願―内―存在」なのである。如来と衆生の我と汝の関係も、人格的な外面関係ではなく、自覚的内面関係である。自覚的内面関係であるから、我と汝は転換転成するのである。すなわち、本願において汝と喚びかけられたとき、喚びかけられた汝の上に、本願を誓うた我が成就し成り立つという、転換転成である。「十方衆生」を汝と喚んで「設我得仏」と喚びかけた本願の「我」は、「至心信楽欲生我国乃至十念」と大悲招喚して、「若不生者不取正覚」と誓うことにおいて、汝と喚ばれた衆生は、すでに大悲招喚のうちにある自身を発見して、「我一心」となり、本願の我は、喚び覚まされたその「一心」の上に本願の自己を成就するのである。本願の「我」は信心の「我」として成就するのであって、それが信における「一人」の成就であり、根源的主体の成就である。そこに我と汝の転換相成がある。

本願招喚において「汝」と喚ばれた行人は、その招喚の声において「我」と語りかけ、「我」と名のり来る本願の声に喚び覚まされた信心において、かえって「我」とされ、「必定の菩薩」「入正定聚之数」と転成されるのである。

西岸上の本願招喚の声を、親鸞は『愚禿鈔』（下）で次のように了解している。

「西岸の上に人ありて喚ぼうて言わく」というは、阿弥陀如来の誓願なり。

「汝」の言は行者なり、これすなわち必定の菩薩と名づく、龍樹大士の『十住毘婆沙論』に曰わく「即時入必定」となり。曇鸞菩薩の『論』には「入正定聚之数」と曰えり。善導和尚は「希有人なり・最勝人なり・妙好人なり・好人なり・上上人なり」・「真の仏弟子なり」と言えり。一心の言は、真実の信心なり。正念の言は、選択摂取の本願なり、また「第一希有の行」なり、金剛不壊の心なり。

「直」の言は、回に対し迂に対するなり。また「直」の言は方便仮門を捨てて如来大願の他力に帰するなり、諸仏出世の直説を顕さしめんと欲してなり。

「来」の言は、去に対し往に対するなり。また報土に還来せしめんと欲してなり。

「我」の言は、尽十方無碍光如来なり、不可思議光仏なり。

「能」の言は、不堪に対するなり、疑心の人なり。

「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を顕すなり、また摂取不捨を形すの貌なり、すなわちこれ現生護念なり。

（「聖典」四五五―六頁）

われら衆生が自己の自我性を根底としている在り方が破られて、その実存の方向が転換されるのは、自己を深く超えたところの根源底からの招喚の声、すなわち「汝一心に正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん」と名のり誓う「我」によるのである。自己存在の底を破って名のり誓う「我」とは、尽十方無碍光如来であり、不可思議光仏である。われわれの自己は、このいのちの底から名のり来る招喚の声、名のり誓う「我」においてのみ、真の自己と成り、真の自己を成就するのである。自己が自己を我と呼ぶよりも、はるかに近い根源底の自己、「我」の招喚において、真実の自己に帰り、真実の自己を成就するのである。

親鸞は、如来によって「汝」と招喚された行人、すなわち諸仏如来の発遣を仰ぎ、招喚に喚び覚まされた真実信心の行人を、龍樹に導かれて「必定の菩薩」と了解し、また曇鸞の教えによって「入正定聚之数」、すなわち現生に正定聚の数に住する者と、深く感佩されたのである。「必定」とは、必ず仏となるべき身と定まるということであり、「正定聚のくらいにさだまる」ということは、「かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」ことである。『一念多念文意』に

この二尊の御のりをみたてまつるに、すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘抜致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定とももうすなり。この真実信楽は、他力横超の金剛心なり。(『一念多念文意』「聖典」五三六頁)

と述べられている。煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌が、諸仏如来の発遣を仰ぎ、弥陀如来の招喚に帰し、本願招喚の声に覚醒した真実信心において、いまや正定聚の位に住し、「かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」のである。それ故に『一念多念文意』は、前掲の文に続いて、

しかれば、念仏のひとをば『大経』には、「次如弥勒」ととときたまえり。(中略)「次如弥勒」ともうすは、「次」は、ちかしという、つぎにという。ちかしというは、弥勒は大涅槃にいたりたまうべきひとなり、このゆえに、弥勒のごとしと、のたまえり。念仏信心の人も大涅槃にちかづくとなり。つぎにというは、釈迦仏のつぎに五十六億七千万歳をへて、妙覚のくらいにいたりたまうべしとなり。「如」は、ごとしという。ごとしというは、他力信楽のひとは、このよのうちにて、不退のくらいにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかんこと、弥勒のごとしとなり。(「聖典」五三六頁)

と言われている。

真実信心の行人は、本願の信において正定聚の位に住する人であり、「かならず無上大涅槃にいたるべき」人である。西岸上の本願招喚において「汝」と喚びかけられた行人は、「我よく汝を護らん」という如来の摂取不捨の誓いのゆえに、願心に喚び覚まされた信心において、正定聚の位に住し、必ず大般涅槃のさとりを開くものとなるのである。

このように「二河白道の譬喩」は、〝仁者、行け〟という釈迦の発遣と、〝汝、来れ〟の弥陀の招喚の二尊の声に開かれる、信心の自覚的内面構造を具体的に語り伝え、獲信において、行人が独立自尊なる存在として「一人」を成就していく、自覚的様相を見事に明らかにしている。信心とは、諸仏如来の教言に発遣され、弥陀如来の本願招喚に喚び覚まされた根源的な覚醒であると尋ね当てた二河譬は、きわめて体験的な獲信の了解である。「信巻」別序の獲得信楽の文も、このような獲信の信仰理解に導かれたものであることは、容易に首肯できる。

しかし親鸞の場合、善導が獲信の信仰体験を、釈迦・弥陀の二尊の発遣と招喚に開かれるものと尋ね当てた理解に導かれながら、「別序」では、弥陀・釈迦といってその次第を逆転されている。このことは注意すべきことである。体験的には、いかなる場合も、釈迦の発遣に値遇して弥陀の招喚に喚び覚まされていくのであろう。しかし親鸞は、弥陀・釈迦といって、釈迦の教言に導かれて帰した弥陀の本願、本願招喚の声に立って、獲信を問題にされているのである。親鸞の場合、信心の如来性起性、すなわち信心とは、諸仏如来の教説に育まれて本願に喚び覚まされた目覚めである以上に、衆生に獲得され、発起した信心は、如来の清浄願心そのものの現前であり、現成である、と信知され身証されたからである。

もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。

（「信巻」「聖典」二二三頁）

信心とは、「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」である、これが親鸞の了解である。信心とは、如来の願心がわれら

衆生の上に現前し現成した事実であって、信心と願心はその回向成就として一である、という極めて独創的な信仰理解である。『歎異抄』の言葉でいえば、「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」といわれた「おもいたつこころ」とは、「そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願」（「聖典」六四〇頁）のこころである。「おもいたつこころ」は、「たすけんとおぼしめしたちける本願」のこころの現前現成なのである。信心と願心は、その体において一であって別ではなく、願心の回向成就が信心なのである。

信心とは如来の願心の回向成就であるという深遠な思索を、親鸞は本願成就文より学び取るのである。

諸有衆生、聞二其名号一、信心歓喜、乃至一念。至心回向。願二生二彼国一、即得二往生一、住二不退転一。唯除二五逆誹謗正法一。（「聖典」四四頁）

この本願成就の文を、「その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」と訓んで、信心とは如来の願心の回向成就であることを証知されたのである。その願心推求の思索が「信巻」の三心一心問答である。「世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来願生安楽国」と表白された世親自督の一心帰命の信心と、本願において「至心信楽欲生我国乃至十念」と誓われた如来の本願の三心との一如性の推求が、三心一心問答である。世親の一心帰命の信心と至心信楽欲生の如来の願心とは、信仰的自覚の事実と根拠において、回向成就として一如である、という親鸞の信仰思索は、親鸞の教えの最も注意すべき信仰主体性論であるといえる。